

われ暁に祈るまじ

——清水正二郎／胡桃沢耕史の諸作品をめぐる

河田 綾

1、増殖する「真相」——暁に祈る事件

『週刊朝日』一九四九年三月一三日号において、「吉村隊長を裁け」ソ連抑留記録から^①という記事が掲載された。この記事は、抑留記の流行の最中であって「日本人はいかなる抑留生活をしたか」、「ソ連およびソ連人」がいかなるものであるかを明らかにすることを目的としている。記事をまとめるにあたり、『週刊朝日』編集部は一二編の抑留記を参照し、そこから抑留の実態を浮かび上げようとした。そうした取材によって明らかになったのは、「事大主義」「卑屈」「エゴイズム」「残酷性」などの「日本人の様々な欠点」であり、それらの「最も悲惨な結晶」としてウランバートルの収容所内で起こった吉村隊における私刑が挙げられるとしている。記事によれば、「現世的で、冷血なエゴイストの下士官」たる吉村隊長（吉村久佳。本名・池田重喜。この時点で本名は明らかにされていない）が、暴力と監視によって収容所内での権力を掌握し、被抑留者たちに過度のノルマを課し、それを達成できなかった者には凄惨な私刑を与えていたという。その私刑というのが、ウランバートルの酷寒の中、衣服を脱がせたまま中庭の枯木にくくりつけて何時間もあるに放置するといったもので、刑を執行された者は明け方の寒気の中で断末魔の悲鳴をあげて絶命するというものであった。こうした記事と連動する形で、同年三月一五日『朝日新聞』朝刊には、「同胞虐殺の悪魔隊長

恐怖の私刑「暁に祈る」 吉村は生きている？」との見出しで、元吉村隊員の吉川巖作への取材記事が掲載される。『朝日新聞』の記事は、吉川個人に対する取材から構成されており、『週刊朝日』での資料から得た情報を体験者の言葉で裏付けする内容となっている。以後、『朝日新聞』紙上を中心に吉村隊に関する報道が相次ぐこととなり、柳田邦夫によれば、^②同年の『朝日新聞』だけで「本数にして八十五本、見出しを除いた本文の行数にして三千三百九十三行に及ぶ」という。こうして報道が過熱するにしたがって、事件の様相が詳らかにされていく。まず、三月一九日朝刊では「吉村隊長は日本に居た」という見出しがついて吉村（以下、實在の人物を指す場合は池田に統一）の居住地や本名が明らかにされると同時に「リンチは曲解だ」という池田の談が掲載された。さらに三月二四日朝刊では、「吉村隊長を告訴」との見出しで池田の刑事責任が追及されることになったと報じ、三月三〇日朝刊では参議院での調査が開始されることが報じられる。かくして、同年四月一二日から三日間、参議院で開かれた在外同胞引揚特別委員会に、池田も証人の一人として出席した。^③そこで明らかにされたのは、①吉村隊内における死亡者は作業場等における外傷によるものが十数名、内科的疾患によるものが二十数名である、②「暁に祈る」の刑罰で死亡した者は二名ほどである、③隊内における処罰は蒙古軍の命令によるところが少なからずあったにせよ、池田の裁量で行われたものも含まれておりその責任を免れることはでき

ない、といったものであった。その後、七月一日に池田は東京地検特捜部からの任意出頭に応じ、そこで逮捕される。吉村隊裁判における池田への判決として、一九五〇年七月の第一審（東京地裁）で懲役五年、一九五二年四月の控訴審（東京高裁）で懲役三年を言い渡された。これに対して池田は上告したが、一九五八年五月二四日最高裁はこれを棄却し三年の実刑判決が確定する。裁判は物証がないため証言のみに基づいて行われ、最終的に池田に言い渡された罪は、逮捕監禁五件と遺棄致死罪一件であった。

池田の逮捕・入獄で一応の解決を見たかに思われたが、しかし、以後も吉村隊事件に関する報道が収束することはなく、たびたび人々の関心を集めることとなる。一九七二年には、元吉村隊通訳の原田春男が『暁に祈るまじ——私刑に泣いた吉村隊事件の真相——』を潮出版から刊行し、吉村隊事件の「真相」について語った。同書において原田は、吉村隊での生活や池田の人物像を詳細に語った上で、「吉村隊長という人は、きわめて特異の存在として、一般の日本人というものとは切り離れて突然出現するというようなものではない。多くの日本人の体質の中には、多かれ少なかれ吉村隊長的な可能性を持っている」と指摘する。原田の言うところでは、吉村隊における様々な悲劇は、暴力や権力に対抗する術を持たず、「人命軽視」に慣らされた「弱い民族」たる「日本民族」が抱える課題と捉えられている。⁽³⁾そして、一九七九年二月には、池田が東京高裁に第一回の再審請求を行う。この際、池田は原田から受け取った証言申立書を添付して裁判所に送るも、東京高裁でそれが受理されたことが各報道機関で扱われると、突如原田から証言申立書が取り下げられ、再審請求も却下されてしまったという。⁽⁵⁾そこで池田は、一九八六年に『活字の私刑台——暁に祈る事件の真相』を出版し、「真相」の究明を求める手記を著す。同書の巻頭にて、池田は「私は、朝日新聞社に殺された」

として、「新聞が真実を報道するというのは、ウソだ。私企業としての利益の追求と擁護、さらに、イデオロギーとセンセーショナリズムがその正体ではないのか。／戦後四十年たっても、私はまだ戦場のただなかに放置されている。その戦場から、私は叫び続ける。朝日新聞社がいかに巨大な権力であっても、ウソを真実に代えることはできない。／私に真実を返せ！」と悲痛な思いを記している。

同書刊行以後、池田は弁護士やジャーナリストからの支援を得ながら再審請求の準備を進めるも、一九八八年九月一日脳出血により他界する。池田の死後、一九九一年三月一日から同年五月二九日まで『朝日新聞』夕刊紙上にて「凍土の悲劇 モンゴル吉村隊事件」⁽⁶⁾が連載される。執筆者の佐藤悠は、池田の『活字の私刑台』について「自分に都合のよいように脚色した虚偽記述」と批判しつつ、池田個人の境遇に対しては軍隊という「強者の論理」が生み出した「戦争の被害者」でもあると述べている。また、池田に対する「悪魔」というイメージは、隊員たちの入院先であったアムラルト病院での噂話や収容所内での憶測や断片的な目撃談から「出来事の全体像を構築したい」という隊員たちの想像力が刺激されたことによってイメージ形成されてしまったのではないかと推察している。こうした朝日新聞社側からの言及に対し、荒木和男は「長大な文章のどこにも初期報道の問題性に触れた部分がなく、第一報の再来とも、開き直りともいえるものだった」と指摘した上で、「朝日新聞は、古い事件だとか戦後の混乱期の報道だとかという言い方で弁明するのではなく、報道機関の人権侵害をめぐる今日の問題としてこの事件が本格的に論議される道を自ら選択したのであるか」との問いを投げかけている。⁽⁸⁾かくして、吉村隊事件は報道被害の先例として、また、極限状況下での人々の倫理が問われる事件として、今なお重要な課題を突き付けている。⁽⁹⁾

さて、ここまで吉村隊事件の概要を経緯と共に確認してきたが、本稿では吉村隊事件のイメージ形成に大きな影響を及ぼしたとされる清水正二郎の諸作品および、後年清水が胡桃沢耕史に筆名を変えて発表した『黒パン俘虜記』^⑩を取りあげて考察する。

清水は、拓殖大学在学中の一九四二年に満州へ渡り、その後一九四五年に現地で召集を受けて特務機関員となる。敗戦後、モンゴルで抑留生活を送って一九四七年に帰国し、自身の抑留体験を『国境物語』^⑪や『虐殺收容所』^⑫などに著した。これらの著作が取り上げられたことで、吉村隊事件の報道に多大な影響を与えることとなる。とりわけ、『国境物語』は前述の『週刊朝日』が参考にした書の一つとされており、柳田邦夫は「『朝日』の第一報のきっかけをつくった大きなモメントは、清水氏の文章だった」と指摘している。さらに、清水は『週刊朝日』が吉村隊事件を特集した際に、元吉村隊員の肩書で座談会に出席し、同時に小説「パンー吉村隊記」^⑬を掲載している。このように、同時期における清水は、吉村隊事件に関するスポークスマンの役割を果たしていた。その後、清水はNHKのテレビプロデューサーを経たのち「壮士再び帰らず」^⑭でオール讀物新人賞を受賞、六〇年代には数多くのポルノ小説を執筆して「ポルノのシミシヨウ」と評されるに至る。しかし、一九六五年一月に猥褻文書販売及び所持の疑いで書類送検され、これを契機としてか、一九六七年ごろから約一〇年間創作活動から距離を置くこととなる。そして、一九七七年に胡桃沢耕史に筆名を改めて以降は、冒険小説や推理小説の作家として注目を集め、一九八三年に再び自身の抑留体験に基づく『黒パン俘虜記』^⑮を著し、これが第八九回直木賞を受賞する。

このように時系列で並べてみると、清水／胡桃沢が脚光を浴びるタイミングが吉村隊事件に注目が集まるタイミングとほぼ時期を同じくしていることがわかる。このことは、清水／胡桃沢が吉村隊事件に関連する

報道に便乗する形で作品をものしていたであろうことを推察させる。それゆえ、柳田は「創作に名を借りたとは言え、『シベリア帰り』を名乗り、さらに当時の『週刊朝日』でも、『元吉村隊員』として名を連ねている清水氏が、「体験に基づいた」というノン・フィクション仕立てで、池田氏の実名を挙げて「面白おかしく」データを書きつらねる態度は、実に『現代的』なパフォーマンズと言うのであろうが、決してほめられることではあるまい」と難色を示していた。

このような経緯を踏まえ、本稿は、清水／胡桃沢がいかなる態度によって小説を著したかを分析することによって、社会的な事件に対して小説がいかなる役割を果たし得るかについて考察する。そして、清水／胡桃沢の挑発的な姿勢とテクストを分析することで、吉村隊事件に関する証言の多くが明らかにしようとする「真相」なるものに対峙する小説の方法論を明らかにする。なお、本稿では清水正二郎と胡桃沢耕史という二つの筆名について、やや煩雑にはなるがそれぞれの執筆時期に合わせて使用することを予め断っておく。

2、「ありの儘」の虚構——清水正二郎『国境物語』・「パンー吉村隊記」——

本節では、一九四九年の初報に多大な影響を与えたとされる『国境物語』と、吉村隊事件を特集した際の『週刊朝日』に掲載された「パンー吉村隊記」^⑬（以下、「パン」）について考察する。

『国境物語』は、日本へ引き揚げる旅路に就く人々の現地でのエピソードを断片的に描く。女性のソ連軍医に見初められてウランバートルに残ることを決意する少年、敗戦後に離れ離れになっていた父と子の再会、離れがたさから妻の性別を隠して收容所生活を送っていた若い夫婦の悲劇と決意、現地の娘に慕われたために帰国の途を危ぶまれる男の逃走劇、收容所内で頭蓋骨を割られたやくざ者の凄絶な復讐、人々の間で喧伝さ

れる吉村隊の悲惨な私刑とその顛末。これらのエピソードが三人称の視点から語られ、時に登場人物に内的焦点化する形でその心情が明らかにされる。ただし、本作は冒頭に「弔詞」を掲げて、「私」の「八千の虐殺された気の毒な方々」に対する忤怩たる思いを書き留めてもいる。その意味で、本作は一人称の視点を内包してもいる。本文中で「私」が前景化することはほとんどないが、「弔詞」では、「言語を絶する悲惨な死に方をした人々」の「恨みと憤り」に対する「せめてもの慰め」となるように「あの残酷な事実をありの儘に書いた」と宣言している。このように、「弔詞」では「ありの儘」に「事実」を書いたと宣言しているが、本文中では創作であることを否応なく想起させる表現が頻出する。たとえば、私刑と監視によつて収容所の権力を手中に収めた吉村隊長について書かれた場面では、「彼は何時でも考へるのである」との書き出しから、「自分こそは人生における輝やかしき勝利者である」、「きつと自分は選ばれた神の子として、この不思議な能力を与えられたのであらう。もしかしたら、もう少しで天皇陛下に生れる身だつたかもしれない」などといった次第に、その内面が詳細に語られていく。本作における吉村は、蒙古軍に取り入って収容所長の地位を得たのち、無惨な私刑と相互監視による管理体制を布くことで収容所内での独裁者となり果せた人物として、「何かしやべりたくて昂奮したくてたまらなかつた人々」の話題の的となっている。吉村隊の状況は、「どこからか通りがかりに小耳に挟んだ話をもつて帰つて自慢げに話さうとしたらもう他の人々がとつくに拾つてきてそれを話してゐたり、嘘と本当との喰違いがあちらこちらで鉢合せして、二十分位前に自分が尾びれをつけて他人に放送したやつがもつともらしく又もどつてきたり、そいつがとんでもなく大きい話に変わつてゐたり、大変なセンセーションを巻き起し」ながら語られていく。こうした記述に明らかであるように、吉村隊をめぐる情報は人口に膾炙する

ことによつて元の話から大きく逸脱した内容に膨れ上がっていく。そのため、本作における吉村は、人々の噂話に尾ひれがついて語られたイメージとして造形されている。しかし、先にも確認したように吉村の内面は、「日本の総べての人間を足もとにひれ伏せさせてその上に峻厳な号令を日夜の別なくかけてひたすら恐れさせてやる」といった野心まで詳細に示されている。にもかかわらず、こうした叙述を行う「私」が、吉村といかなる関係にあつたかは明らかにされない。さらに、作中吉村は隊員たちの反逆にあつて殺害されており、その内心を知る術がないことが明らかとなつている。かくして、人々の噂話から発生した吉村像は、「私」の小説的な語りによつてイメージを強化し、そうした像が一人歩きする形で残忍な独裁者に形象化する。

『国境物語』の末尾には「終末の為の序章」という短文があり、そこで再び作者が「僕」と称して姿を現す。「僕」は、「御苦勞無しの少数の間」への呪詛にも似た思いを吐露しつつ、「彼等が若し此の物語を読んだなら、きつとこの中に書かれてある事実は虚偽と誇張の塊りであると言ふに違ひない」という。そのうえでなお、「総べての虐げられた捕虜たち」であれば、「勿論此れは全部事実ですとも、それ所か、僕等に言はせれば、むしろ生ぬる過ぎる位です。何故もつと詳しく突込んで悲惨な事実を書いてくれなかつたんですか」と言うはずだともいう。このように、作者（「私」・「僕」）は、自らにとつての「ありの儘」の「事実」が、ある者にとつては「虚偽と誇張の塊り」であり、また別の者にとつては「生ぬる過ぎる」ものと捉えられることに自覚的である。その意味で本作は、個別化された「事実」の断片を散りばめることで、抑留の「悲惨な事実」をモザイク状に構成しようとする意図に貫かれた物語だといえよう。

さて、前述した『週刊朝日』で催された座談会において、出席者から吉村隊事件に関する報道に誇張はないかと質問された際、清水は「『暁に

祈る」が裸でやらされたことも誇張です。実際は防寒具をつけていたんです」と臆面なく発言し、さらに『国境物語』に描かれた病人たちの大量殺戮は事実としてあったかと問われた際には「はつきりいえないけど、射殺されたということだった」「見たわけではないが、当然射殺された」と想定し得る理由がある」などと回答をしている。先にも述べた通り、そもそも『国境物語』で吉村は殺害されており、池田の生存が確認されている時点で本作がフィクションであることは明白だ。それゆえ、この座談会は、吉村隊事件の事実関係を明らかにする方向には向かわず、「吉村隊の教訓」や「吉村隊は固有名詞ではなくて実は普通名詞なんではないか」（いずれも編集部の発言）といった論点から事件を一般化して語ろうとする方向へと向かっていく。こうして、座談会は「利己主義」に対する批判と「日本人の教育は、強い善人を作ることに力を注がねばならん」（安倍能成）、「収容所内の生活し易い条件を自ら戦いとするということが大切だ」（福島正夫）などという結論に終始してしまふ。

では、同号に掲載された「パン」において、吉村隊はいかに描かれていたか。本作の主人公佐藤正二郎は、民団出身で最近転入したばかりの隊員である。佐藤は、同じく民団出身で現在は吉村の通訳として所内で絶大な権力を有している永井が、過去に民家に押し入って財産を強奪し、その家の主人を殺害した場面を目撃していた。そのことを永井本人にも勘付かっているため、佐藤は報復を恐れて永井との直接的な関わりを避けて生活している。ある日、佐藤は仲間と共に炊事場の残飯を漁っていたところ、偶然永井と鉢合わせる。事情を知らない永井は、自らも飲酒していた後ろめたさもあって、残飯を漁っていた者たちを一瞥しただけで特別の注意もせず、その場をやり過ごす。このような態度を見た佐藤は、「永井老人に圧迫された反動からも彼の悪事についてしやべりたくてたまらない気持ち」になって、つい身近な仲間たちにかつての永井の悪

事を漏らしてしまう。すると、それを聞いた仲間の一人は、褒美のパンを求めて佐藤の発言を吉村らに密告する。結果、外へと連れ出された佐藤は吉村の側近から暴行を受け、門の傍の電柱に括りつけられる。寒空の下、苦痛に喘ぐ佐藤に対し、密告を果たした仲間は「パンの美味さでもう心が一杯」になり、佐藤のことなど「忘れ」てしまっている。かくして、同文は「人々は自分が生きていることさえに、夢うつ、で生きているのだから、他人の生死などに考えるの一部をもさくことはできなかった。考えることさえ吉村隊では腹のすく悲しい努力なのであった」といった言葉で閉じられる。

一九四九年五月、『週刊朝日』の刊行後「パン」に作中人物として描かれた永井正は、清水を名誉毀損で訴えることとなる。これに及んで、清水は「多くの日本人を殺害した日本人の」引用者注）ボスたちを摘発するために書いた、ボスたちの非情ぶりはいくら誇張してもまだ足りないほどだ」といって、「パン」における永井の造形が「ウソ」であることを認めた。さらに、「当時の永井氏の地位、権限、所内の空気を描くためには単なる形容詞や誇張では内地にいた人には分らない、彼の悪党ぶりはあれでも足りない」などと発言し、「名誉毀損には喜んで服する、しかしそれによつて永井氏の悪事を暴露して吉村隊長と同じに社会的制裁を加えてやる」と嘯いた。このような清水の挑発的な態度に対して、牧山武は「血を吐く思いの遺族の心をしめ上げるようなウソを羅列し、一人よがりの創作欲を満足させている清水は、世間の非難に『あれは小説です』とすましているが、記録文学の仮面にかくれた清水の魂胆は、あまりにも悪ラツである」と批判した。このような批判を受けてか、その後の『週刊朝日』では、「パン」における登場人物と実在の永井正とは同一人物ではないという訂正記事を掲載することとなった。^⑨しかし、こうした清水の発言は、吉村隊事件の「真相」究明に躍起になっている同時期にあっ

て、重要な問題を提起している。清水は、吉村隊の「真相」を明らかにするために「ウソ」や「誇張」によって、その内実を問い直そうとしている。こうした手法は、『国境物語』から連続する問題意識を有している。つまり、「ありの儘」の「事実」を伝えるために、実際よりも話を「誇張」して描いたり、時には「ウソ」を差し挟んだりすることによって、事件の核心に迫ろうとしているのだ。ここには、事の真偽を二項対立で捉える固定的な見方に再考を促す姿勢を看取することができよう。むしろ、これら一連の清水の態度は、極めて挑発的で露悪的なものである。しかし、こうした姿勢であつてこそ、「事実」を越えた核心に迫ることが可能になる。その意味で、『国境物語』と「パン」は、「事実」を「ありの儘」に伝えるという「ウソ」や「誇張」を弄することで、現実の事件に働きかけようとする作者の問題意識をはっきりと刻みつけている。

3、「生命の灯を燃やして」「面白い物語」を仕立てる——胡桃沢耕史『黒パン俘虜記』

次に、一九八三年に刊行された『黒パン俘虜記』を検討する。本作は、一九八一年から一九八三年にかけて『オール読物』に掲載された「黒パン俘虜記」（一九八一年二月号、単行本化の際に「独裁者の約束」に改題、「白い行進」（一九八二年四月号）、「俘虜たちの休日」（一九八三年一月号）、「われ暁に祈るまじ」（一九八三年六月）の四つに、『国境の夜』『家畜列車』『最後の審判』『祖国への船路』の四章を書き下ろした上で単行本化された。物語は、「乙種幹部候補生」の主人公「ぼく」（その肩書から周囲には「オツカン」と呼ばれる）が、二〇歳から二二歳の時期を過ごした収容所での体験を回想しながら語るといった形式になっている。ただし、「ぼく」が語っている時制は明らかにされておらず、少なくとも日本へ帰国して以降の時点から語られているということしか判然としな

い。このことの持つ意味は重要である。なぜなら、本作における吉村隊に関する記述は、かつての『朝日新聞』や『週刊朝日』で素描された吉村隊イメージを踏襲するものとなっているからである。

ノルムのできない兵隊が、夜通し素っ裸で零下何十度の戸外の木に縄でつながれる。初めのうちは足踏みしたり、体中を掌でさすったりしているが、明け方には気力がつきる。するとどんな兵士でも倒れる前に大声で母の名を呼んで泣きだす。それで『暁に祈る』と名づけられたらしい。

ぼくは暗然として全身凍傷で苦しむ兵士を眺めていた。小政が別に人情家というわけではないが、ぶん殴ったり減食させるだけで、こういうたちの悪いリンチはしなかった。

引用は、収容所で強権を振るっていたやくざ者の小政から逃れて、新たにアムラルト病院で勤めることとなった「ぼく」が担当の軍医と会話する場面での描写である。本作において吉村は、過剰なノルムを俘虜たちに強いながら、そこで得た利潤を独占して支配の体制を構築した「帝王」「絶対者」などと評されている。それゆえ「ぼく」は、何とかして吉村隊に送られることがないよう、諸方に画策して病院での地位を得ようと努めることとなる。こうした表現は、一九四九年当時の「悪魔」と報じられた吉村像の二番煎じに過ぎず、裁判によって池田の所業が一応は明らかにされ、さらに再審請求まで報じられていた当時の認識を想定すれば大きな齟齬をきたしている。そのため、一九八六年六月には池田が胡桃沢と文藝春秋を名誉棄損で訴えたとの報道がなされた。⁽²⁰⁾この記事で池田は、①胡桃沢が吉村隊に在籍したことはない、②電柱に括りつけて死亡させたことは高裁判決でも認めていない、③『黒パン俘虜記』に描

かれるような「吉村親衛隊」など存在しなかった、④俘虜たちの給与のピンハネも行っていないとコメントし、さらに、本作の影響で池田自身だけでなく家族の生活にも影響が出ており深刻な被害を受けていることを訴えた。このような事態に対して、胡桃沢は同記事内でコメントを寄せており、「(吉村隊について)書いたことは全部見たことだし、実際にあったことだ。証人も少なくなった今となつては、水掛け論になるだろう。訴えられても、小説で書いたのだから私はビクともしない」と反論している。「訴えられても、小説で書いたのだから私はビクともしない」と傲然と言つてのける姿勢からは、小説であれば何を書いても良いのかという反論を否応なく想起させる。しかし、そうであつてなお、本作は書かれ、さらに権威ある文学賞を得るに至つたことは改めて検討されなければなるまい。

本作が直木賞を受賞した際、選考委員の一人である井上ひさしは選評の中で「主人公がいくら単純でも無邪気でもかまわないが、それを見つめている作者に、主人公を戦場へ引きずり出した国家や、主人公にこれほどの苦しみを強いる戦争に対する勘考がほとんどない。このことにかすかに不審の念をいだいた」とした上で、「ただしこの気持ちは、作者の物語づくりにかける執念に圧倒されて、ときおりどこかへ消え去つてしまふ」と指摘した。井上と同様、池波正太郎もまた「この人には自分の作品に対する、もつとも肝心なものが欠けている。小説としての『真実』がないのである。ゆえにフィクション、ノン・フィクションにかかわらず『こしらえもの』になつてしまうのだろう」と評している。こうした否定的な評価に対して肯定的な意見としては、山口瞳の「胡桃沢さんは純粹無垢なのか、よほどの楽天主人なのか、よくわからない。とにかく面白い。爽快感がある」といったコメントや、水上勉の「何もかも首肯させられて、気にならなくなり、頁を追うほど興味がつもの。凡手では

ない。荒唐りといつていい」といったものが挙げられる。これらの評言から明らかにするのは、本作は国家や戦争に対する「勘考」や「小説としての真実」に欠けているが、「物語づくり」には妙味があるといった作品評価であろう。このような評価は、『黒パン俘虜記』における物語内容が大きく影響しているものと考えられる。というのも、主人公の「ぼく」は、通訳として働くかたわら、収容所内の権力者たちに「映画講談」と称する演芸を披露することによつて食糧と信頼を得ていた人物なのである。この「映画講談」とは、「ぼく」が過去に見てきた映画の筋を「タイトルからエンドマークまで」逐一語つて聞かせるといつたもので、娯楽のない収容所にささやかな潤いを齎す芸として重宝されていた。この芸のおかげで、「ぼく」は他の俘虜たちよりも多くの食糧を得て、生き延びることができた。だからこそ、「ぼく」の「映画講談」にかける思いは強く、何としてでも聴衆の興味を惹きつけようと努力する。このように、「ぼく」にとつての「映画講談」は、極限状況下を生き抜くための術なのである。

ぼくはアムラルト病院での第一回公演に、その商船テナシチイをやろうと決めた。決めたすぐから迷いが出た。ここではあのテーマは少し難解かもしれない。受けるだろうか。しかし何事もやつて見なくては分らない。これも賭けだ。度胸を据えた。これからの病院での安穩な生活はほしい。でも自分の青春の記念をもう一度振返つてみるの方が、そのときのぼくには大事なことのよう思えてきた。駄目だったら玉碎しよう。それに話術には自信があつた。きつと面白い物語にしてみせる。

引用は、患者たちの支持を得て院内に留まることを許されるために、

「映画講談」を画策する場面である。この場面において「ぼく」は、「自分の青春の記念をもう一度振返ってみることを通じて、聴衆に「面白い物語」を届けることを決意する。自らの生命を賭して「青春の記念」を「面白い物語」に仕立て上げること。このことは、作者の胡桃沢に敷衍することができるのではないか。胡桃沢は、直木賞受賞に至るまでの創作活動を振返って、「まさにぎりぎりの戦いであった」、「鉛筆を削り、直木賞を夢みて、生命の灯を燃やしていた、この二、三年の充実した気持は、多分もう二度と味わうことはない」と述べている⁽²⁾。この発言から窺い知ることができるように、「映画講談」に臨む「ぼく」と「直木賞を夢みて、生命の灯を燃や」す胡桃沢とは二重写しになっている。その意味で、胡桃沢にとつての小説こそ、「ぼく」とつての「映画講談」だった。このことを踏まえれば、『黒パン俘虜記』における吉村隊に関する記述が一九四九年当時の報道の二番煎じに過ぎなかったことも理解できる。つまり、「ぼく」の行う「映画講談」が既存の映画作品の語り直しであることと同様に、『黒パン俘虜記』もまた既存の吉村隊イメージを語り直すことで「面白い物語」を仕立て上げようとしているのである。「生命の灯を燃やして」、出来合いの「面白い物語」を演じること。ここに、『黒パン俘虜記』における胡桃沢の作家としての矜持が見出だされよう。

4、われ、暁に祈るまじ——結びにかえて

本稿では清水正二郎／胡桃沢耕史の作品を中心に、吉村隊事件に関する言説について考察してきた。それによって明らかとなったのは、清水／胡桃沢が一貫して「ウソ」や「誇張」を駆使する小説の方法論によって「真相」に対峙していたということである。そうした姿勢を固持することが、小説を書く者としての矜持だった。様々な立場から語られていく無数の「真相」に抗するには、「ウソ」や「誇張」を駆使する小説とい

う表現形式が求められたのである。だからこそ、『黒パン俘虜記』は、「ぼく」という視点人物を据えることによって、徹底的に個の視点に立つ。それは決して「日本民族」などという集団に置き換えて、一般化されるものではない。吉村隊事件の内容を抽象化して「真相」なるものを語るのではなく、不遜かつ傲慢なほどに「ぼく」の視点の特権化して「面白い物語」を仕立て上げること。このような態度は、現在の視点から見ればプライバシーの侵害や報道被害の助長へと繋がりがかねない。しかし、そうであつてなお、「われ、暁に祈るまじ」と徹底的に個を前景化させることは、抑留の記憶を集団の記憶へと差し替えさせない極めて峻厳な意地を感じさせてならない。

ある出来事を語る上で、唯一の「真相」など存在しない。あるのは、無数の「われ」が語る物語の集積である。とすれば、問われるのは、いかに語るかということに他なるまい。その意味で、清水／胡桃沢の諸作品は、「真相」に対抗する一つの方途を示し得ている。

注

- (1) 記事に「私たちの読んだ本」として紹介されているのは、堀清・富士虔吾『俘虜・ソヴェートより還る』（逍遙書院、一九四八年四月）、田鎖源一『裏切られた兵隊』（知識社、一九四八年一月）、ソ連帰還者生活擁護同盟文化部編『われらソ連に生きて』（八月書房、一九四八年二月）、樋口欣一編『ウラルを越えて』（乾元社、一九四九年三月）、清水正二郎『国境物語』（第一文庫、一九四九年一月）、清水正二郎『ウランバートルのかんざし草』（『雄鶏通信』一九四八年三月号）、津島岳雄『生きて来た』（東山閣、一九四八年一〇月）、淡徳三郎『三つの敗戦』（時事通信社、一九四八年二月）、石川正雄『闘う捕虜』（ナウカ社、一九四八年一月）、鈴木雅雄『春なき

二年間」(自由出版株式会社、一九四八年六月)、吉田金一「ソ連見聞記」(『雄鶏通信』一九四八年一〇月号)、西村忠朗「チヌワイ村」(『雄鶏通信』一九四八年四月号)の十二編。

- (2) 柳田邦夫「解説」(池田重善・柳田邦夫『活字の死刑台』青峰社、一九八六年九月)

- (3) この時、証人として出席したのは、池田重喜、笠原金三郎、原田春男、酒井一郎、鎌谷参司、君島甚五郎、長谷川貞雄、阿部忠、堀金榮、酒井幸次、小峰光治、清水一男(以上、吉村隊関係者)、津村謙二(ナホトカで行なわれた人民裁判のリーダー)、田代喜久雄(朝日新聞社)、山崎隆弘(毎日新聞社)であった(『参議院 在外同胞引揚問題に関する特別委員会会議録』の第十五号から第十八号、一九四九年四月を参照)。

- (4) 原田は、雑誌の取材(原田春男、菊池昌典「『暁に祈る』論理と感性」、『現代の眼』一九七二年六月)でも「ああいう人(池田のこと」引用者注)をつくり上げていった、生み出していったプロセスというものは、やっぱり日本民族としての一人一人がかみしめて、そして体質をあらためるといえるか、そういう課題があるんじゃないか」と発言している。

- (5) 池田重善「手記」(池田重善・柳田邦夫『活字の死刑台』青峰社、一九八六年九月)

- (6) 同連載は、一九九一年一二月に「補遺・『真相』を追って」と「資料」(『判決要約』、「吉村隊の二年間」、「モンゴルにおける終戦時の日本人」)を付して朝日新聞社より単行本化された。なお、引用には単行本を用いた。

- (7) 荒木和男「暁に祈る事件——初めに報道ありき」(『文芸春秋』一九九五年新年特別号)

- (8) ちなみに、佐藤は単行本のあとがきで、一九四九年当時の各種抑留記や『朝日新聞』の報道が事件を誇張してセンセーショナルなものにしていた点について「勇み足」だったと述べ、「池田氏に気の毒なことをした」と綴っている。

- (9) 近年では、小池新が「文春オンライン」に連載する「昭和事件史」にて吉村隊事件が扱われた(『第一報』めぐり揺れた「暁に祈る」事件」二〇二二年四月四日、<https://bunshun.jp/articles/-/44535>)最終閲覧日：二〇二二年五月二日

- (10) 胡桃沢耕史『黒パン俘虜記』(文芸春秋、一九八三年五月)

- (11) 注1参照。

- (12) 清水正二郎『虐殺収容所——捕虜はメーデーに殺された』(第一出版、一九四九年五月)

- (13) 注2に同じ。

- (14) 『週刊朝日』一九四九年五月一日号。同号では、座談会「吉村隊の底に流れるもの」が行われ、出席者には清水の他に、安倍能成(学習院長)、戒能通孝(早大法学部教授)、磯田進(評論家)、福島正夫(法務省資料統計局資料課長・ソ連引揚者)、笠原金三郎(元吉村隊員)、笠信太郎(朝日新聞社論説主幹)、荒垣秀雄(朝日新聞社論説委員)が参加した(肩書は当時)。その他にも、池田の手記「私の立場」や、全国から送られてきた投書をまとめた「世論の裁き」が掲載されるなど、様々な記事が誌面を彩った。

- (15) 清水正二郎「壮士再び帰らず」(『オール讀物』一九五五年一〇月号)注2に同じ。

- (16) 「問題化した記録文学のウソ 吉村隊事件永井証人が告訴」(『読売新聞』朝刊、一九四九年五月一日)

- (17) 牧山武「ソ連抑留手記の正体を洗う」(『真相』一九四九年七月)

(19) 「訂正」『週刊朝日』一九四九年七月三十一日号)

(20) 「小説」『黒パン俘虜記』は事実無根(『読売新聞』朝刊、一九八六年六月一三日)

(21) 池波正太郎、五木寛之、井上ひさし、源氏鶏太、城山三郎、水上勉、村上元三、山口瞳「選評」(『オール讀物』一九八三年一〇月)

(22) 胡桃沢耕史「直木賞の魔力」(『現代』一九八三年九月号)

※引用に際して、適宜旧字は新字に改め、仮名遣いは原文ママとした。

また、引用文中における／は、改行を示す。なお、本稿は拙著『1949年解説——復興の道程』(『週刊朝日』総目次・執筆者索引 1945～1952—新聞社系週刊誌の戦後占領期)金沢文圃閣、二〇二二年十一月刊行予定)と一部内容が共通している。

(かわた りょう サレジオ工業高等専門学校一般教育科助教)